

説 林

瑞獸白澤及び角端に就いて

原 田 淑 人

支那には、古來祥瑞として尊ばるゝ獸類極めて多

く、山海經、孫氏瑞應圖

瑞應圖三卷、隋書經籍志注によれば、梁孫柔之の撰なりといふ。今佚して傳

らず。清馬國翰の玉函山房輯佚書に諸書引 宋書符瑞志の如

き、瑞獸に關する記事少からず。瑞獸の種類には、

麒麟、白澤、角端、獬豸、比肩獸、の如き、特殊の

もの、外に、虎豹犀象鹿熊狐狼兔犬等の普通の獸類

あり。瑞應圖に見ゆるものを舉ぐれば左の如し。

麒麟 白澤 乘馬 駒駮 跂蹠 周市 角端

獬豸 兕 白象 白象 白麋 白鹿 天鹿

赤熊 白兔 赤熊 白狼 白狐 文狐 九尾狐

青狐 赤兔 一角獸 三角獸 比肩獸 六足獸

騶虞 白虎 玄豹 鼪犬 豹犬 龍馬 騰黃

飛兔名 騶虞 駮馬 白馬朱鬣

又唐六典武庫令旗制の條によれば、

白獸旗 龍馬旗 玉馬旗 麒麟旗 飛麟旗 飛黃

旗 駮駮旗 白澤旗 五牛旗 犀牛旗 金牛旗

兕旗 三角獸旗 角端旗 騶駮旗 騶牙旗 黃鹿

旗 白狼旗 赤熊旗 辟邪旗

あり。唐代瑞獸の種類を見るべし。又瑞獸を畫刻せ

るものには、後漢武梁祠石室祥瑞圖を始とし、碑石、

墓誌、石棺、陵墓の石獸、明器、工藝品の裝飾等あり。

中には、形状怪異、得て名け難きもの寡からず。以上

挙げたる瑞獸の中、吾人は白澤と角端とに就き、聊

鄙考を述べんとす。

一、白澤

瑞應圖によれば、

黄帝巡於東海、白澤出能言語、達知萬物之精、以戒於民、爲除災害、賢君德及幽遐則出、開元占經卷一百十六所引、玉函山房輯佚書に據る

とあり。淵鑑類函獸部四白澤條所引によれば、山海經に、東望山有獸名曰白澤能言諸王者有德、明照幽遠則至の句あり。

吾人百子全書本、及び經訓堂叢書本を見たるも、并に此條なし。白澤は能く言語し、人民の

爲に、災害を辟除する獸なりといはる。宋書符瑞

志下には、白の字を省き、單に澤獸とし、瑞應圖と

同様の記事あり。黄帝内傳此書未見、淵鑑類函獸部四白澤條所引に據る。に

は、更に詳細なる事を録し、

黄帝巡狩、東至海、登桓山、於海濱得白澤神獸、

能言、達於萬物之情、因問天下鬼神之事、自古及今、

精氣爲物、遊魂爲變者、凡萬一千五百二十種、白澤

言之、帝令以圖寫之、以示天下、乃作辟邪之文、以

記之、

と云へり。黄帝内傳は如何なる書なるや、詳にし難

しと雖、六朝時代に、白澤圖といふものありしは明なり。玉函山房輯佚書の考證によれば、

白澤圖一卷、案孫氏瑞應圖、黄帝巡于東海、白澤

出能言語、達知萬物之精、以戒於民、爲除災害、

抱朴子論黄帝云、窮神姦則記白澤之辭、蓋古有是

說也、南史梁簡文帝紀、有新增白澤圖五卷、隋唐

志並有白澤圖一卷、不著撰人姓名、今佚、從諸書

所引輯、得四十餘節、

とあり。即白澤は六朝時代に於て、辟邪の神獸とし

て想像せられ、當時その形を圖して邪氣を辟除した

る風の存在せしを知るべし。我徳川時代にありて

も、安永天明の交、白澤圖といふもの、坊間に行は

れたること、諸家隨筆に散見せり。例せば、

閻立本が圖には、虎首熊身にして黃褐色なりしと。

又獏をも、獅子をも、辟邪とよぶ。溫邪をさると云

ふより、かくよぶなり。近日白澤を多かく。獏の

一名を白澤とも云へり。(仲山高陽撰畫譚雜助、獅

子圖條)

近來坊間ニ印行スル白澤圖上ニ、諸妖鬼ノ名ヲ記ス。予江戸ニ在シ日、或人白澤圖ヲ齎シ來テ讀ヲ

請フ。因テ諸書ヲ檢スルニ、委細ナル説ナシ。事文類聚、天中記、三才圖會、黃氏獸經等並ニ孫氏瑞應圖ヲ引ク。其説一般ナリ。曾テ印行ノ圖上ニ

所記ノ妖鬼ノ諸名ナシ。或ハ其後世ノ杜撰ヲ疑フ。

コレ杜撰ニ非ズ。法苑珠林ニ、白澤圖ヲ引ク、其中、具サニ諸鬼ノ名ヲ出ス甚廣シ。然レバ、坊間

ノ所行、據アルコトナリ。依之、白澤圖ト云モノ、

玄暉師ヨリ以前、既ニ行ハルト見ユ。師ハ宣律師

ノ弟、貞觀中ノ人ナリ。然レバ、所謂白澤圖ハ、

六朝ノ時作ルトコロカ。未見其據、懸斷スベカラ

ズ。(六如上人撰、葛原詩話、白澤辟邪圖條)

の如き是なり。當時白澤は、獺の一名とせられ、その形は、象獅子虎の三猛獸を合せたるが如く圖せられたり。白澤か獺の一名とせられしは、我江戸時代に

のみ限らず、唐代に於て、已に然りしが如し。

獺は、爾雅釋獸に、白豹とあり。晉郭璞の注によれば、

獺、白豹、甚似熊、小頭卑脚、黑白駁、能舐食銅鐵及竹骨、骨節強直、中實少髓、皮辟濕、或曰、豹白色者、別名獺、

とあり。即獺は、豹と熊との合形獸として想像せら

れ、その色は、白とせられたり。唐白居易集に、獺屏贊并序あり。序に曰、

獺者象鼻犀目牛尾虎足、生南方山谷中、寢其皮辟

瘡、圖其形辟邪、予舊病頭風、每寢息、常以小屏

衛其首、適遇畫工、偶令寫之、按山海經、此獸食

鐵與銅、不食他物、因有所感、遂爲讚焉、

と。唐代獺の形狀更に變じ、象鼻を附せらるゝを見るべし。宋陸佃の埤雅獺の條に、

獺獸似熊、象鼻犀目獅首豺髮、小頭卑脚黑白駁、能舐食銅鐵及竹、骨實無髓、皮辟溫濕、以爲坐穩

臥褥則消膜外之氣、

とあり。宋に及び、更に一層變形して、獅首豺髪を加へらるゝに至れり。此の如く、獺獸の形態が屢變化せるは、故なきに非ず。唐代には獺と名けられたる實在の獸類あり。舊唐書薛萬徹傳を見るに、太宗、嘗召司徒長孫無忌等十餘人、宴於丹霄殿、各賜以獺皮、

とあり。是れ支那の西南及び印度地方に産するテーパー (Tapiir、獺と譯す) なるべきか。テーパーは奇蹄類、驢より稍小、體軀肥滿せる、犀形の獸なり。その特異とせる點は、その鼻及び上唇長く突出して、屈伸自在なるにあり。白樂天の所謂象鼻とは、之を指ししならむ。又六朝より唐に亘り、西域より生きたる獅子の傳來あり。唐太宗の時、康居國より獅子を獻じたる時、虞世南に命じ、獅子賦を作らしめしことあり。獅子の傳來と共に、獅子の彫刻の如きも、頗巧妙なるに至れり。唐代陵墓の石獅子 Chia-yen-hes: Mis-

ston. Archéologique Dans Le China Septentrional 2 參照 を見るも、當時如何に其精巧なりしかを知るべし。隨て、獅子形の、他の靈獸に影響せること少からず。獺の如き固より想像に成れるもの、尋常一様の形態を以て、満足し得べきに非ざれば、或は虎豹の如き猛威を添へ、或は犀象の如き多力を加へて、神靈なる形態を作成せるもの、故に獅子の如き、猛威虎豹に過ぎ、多力犀象を凌ぐものあるを見れば、新にその威風を取りて、獺に附加せるは、怪むに足らざるべし。麒麟の如き仁獸すら、唐代に於て、獅子形を取れるを見れば、思半に過ぐるならむ。 角端條 埤雅に、豺髮獅首とあるは、蓋此故に因るなるべし。斯の如く獺の獸形に、種々變革あるも、白色にして、銅鐵を食ひ、邪氣を辟くといへる點に於ては、同一なり。

獺の字、一に貊(貊同じ)に作る。北齊劉勰の新論、殊好の條に、

走貊、美鐵、

とあり。又貂澤に作る。唐段成式の酉陽雜俎、貂膏の條に、

貂澤大如犬、其膏宣利、以手所承、及於銅鐵瓦器中貯、悉透、以骨盛則不漏、

とある是なり。美鐵といひ、銅鐵悉透といひ、獺の食銅鐵といふに一致せり。而して獺と白澤とは、何れも辟邪の獸たり。故に獺、(貂同し)、白澤、貂澤の同一なるを知るべし。扱獺は西南の獸なるに、白澤が東方の神獸と目せらるゝは、恐く濊貂の貂に附會せるならむ。貂族の東方に居住し、戰國以來、夙に支那人によりて、斯く呼ばれたるは、人の知る所なり。

白澤即獺獸は、辟邪の意によりて、種々裝飾文様として用ゐられしが如し。唐代屏風に圖せられ、(白樂天獺屏贊序)、又旗紋として用ゐられし(唐六典武庫令)ことは、前に已に述べたり。その他、唐代白澤枕あり。唐書五行志に、

韋后妹七姨、嫁將軍馮太和、爲豹頭枕、以辟邪、白澤枕、以辟魅、伏熊枕以宜男亦服妖也

とある是なり。我徳川時代に、獺枕といふもの行はれしは、人の熟知する所なり。故事要言に、

節分に獺と云ふ獸の形を畫き、枕に敷きて惡夢を見ずとて、俗にする事なり。俗説に、獺は夢を食らふ獸なりといふ。

とあり。小島知足は、その酣中清話に、その意を尋ねて、

白居易カ獺屏贊序ニ、寢其皮避温、圖其形避邪トアリテ、夢ヲ食フト云フコトナシ。後漢書禮樂志ニ、莫奇食夢トアリ。莫奇ノ誤リテ獺トナリタルニ非ズヤ。

といへり。思考によれば、獺枕は唐の白澤枕の故事を襲ひしものなるべし。又六朝より隋唐に互り、鏡背の文様として、獅子形の獸を附したるものあり。元來鏡鑑それ自ら、辟邪求福の意を偶するものにし

て、西京雜記に、

宣帝被收繫郡邸獄臂上猶帶史良娣合采婉轉絲繩、
繫身毒國寶鏡一枚、大如八銖錢、舊傳、此鏡見妖魅、
得佩之者、爲天神所福、故宣帝從危獲濟、及即大
位、每持此鏡、感咽移辰、常以琥珀管盛之、絨以
感里織成錦、一曰斜文錦、帝崩、不知所存、

とあるが如きは、その一例たり。故に或は文様とし
て靈異の禽獸を附し、或は銘辭として辟邪求福の句
を連ぬること珍からず。金索六、漢黍言竟と稱する
鏡の銘に、辟除不祥宜古市、長保二親利子孫とあり。
同六朝靈鑑(獅子形の獸四を附す。第一圖と類似す。)

の銘に、防姦集社の句あるが如き然りとす。第一圖
は、東京帝國大學文科大學所藏の六朝鏡背なる獸形
の拓本なり。恐く白澤辟邪獸と見て可なるべし。所
謂海獸葡萄鏡の獸も亦然らむ。下總國香取神社所藏、
及關野工學博士所藏の該鏡に見ゆるものは、明かに
獅子形の靈獸なり。

文鏡集成古
鏡部參照

又我奈良朝時代の鬼

瓦璫 文鏡集成古
瓦部參照

は、その形狀獅子に類し、是亦辟邪

獸たる白澤と何等か關係あらむと思はる。又茲に
特に注意すべきは、所謂狛犬の像なり。 狛犬の事は、
本多忠憲の狛

犬考に、種々其資
料を集めたり。獅子狛犬の像は、已に平安朝以來 延喜
左右

衛門式に曰、凡大儀之日、居居像於會昌門左、事畢返收水府とあり、
若し文安御即位調度圖にいへるが如く、兎像を以て狛犬なりとせば、
狛犬像は平安朝以前に於て、已
に存在せしものと認むるを得。盛に行はれ、或は几帳屏風

の傍に鎮子として置かれ、或は宮中御帳間の戸に畫
かれしこと、源氏物語、枕草子、建曆御記等諸書に

見えたり。 狛犬考
參照。元來狛犬なるものは、その形狀犬に

非ずして獅子なり。狛犬安置の意の、辟邪鎮護にある

ことは、神明渠談 狛犬考
所引。考に

南殿ニカケノ狛トテ、繪ニカ、レシハ、史記秦本

紀ニ見タリ。磔狗ノ例ニテ、邪氣ヲ避ルノシルシ

也。唐禮集義曰、畫雙狛於宮内、取事於秦故、云

々、又社前ニ置クハ狛也、獅ノ類ニシテ、獅ヨリ

猛シ。唐ノ則天皇后女主ナルユヘ、造之玉座ニ置

キ、萬物ノ鎮子ニナサレシヨリ、日本ニモ、唐家

ノ風ヲ用ル事多キユヘ、故ニ天子ノ裾ノ鎮子ニ是ヲ用ヒ玉フ事、山槐記中山内府忠親作ニ見エタリ。

とあるに、略從ふべし。唐風の移入たるや、論を待たず。然れども、吾人は、狛犬の狛は、即貂（貂同ジ）にして、亦等しく白澤辟邪獸なるべしと思考す。

二、角端

角端は、白澤と同じく、想像の瑞獸たり。瑞應圖に
よるに、

角端、日行萬八千里、能言、曉四夷之語、明君聖主在位、明達方外幽隱之事則角端奉書而來、開元占經所引玉函山房撰佚書に據る

とあり。宋書符瑞志下には、その形狀を記るし、

角端、鹿形馬尾、綠色、獨角、角在鼻上、日行萬八千里、又曉四譯之語、明君聖主在位、明達方外幽遠之事則奉書而至、

といへり。大體に於て、麒麟の一種と見るを得べし。故に瑞應圖麒麟の條に、

青曰聳孤、赤曰炎駒、白曰索冥、黑曰角端、黃曰麒麟、

とあり。此に黒色といひ、符瑞志に綠色とあるも、固想像獸の事なれば、深く論究するの要なかるべし。然れども、その性格に於ては、頗麒麟と異なるものあり。日行萬八千里といひ、能言曉四夷之語といふが如き然りとす。其奔馳の疾速なることは、寧彼のユニコルン（一角獸）に一致するものあり。第二圖は、東京帝國大學文科大學の所藏にかゝる、陶製の獅子形一角獸にして、唐代の明器と思はる。其最注意すべきは、左右肩部に、人面を有する點なりとす。（第三圖参照）靈獸が獅子形を取る所以は、前に已に述べたるが如し。故に之を以て獅子化せる麒麟と見做すも亦可なり。然れども、肩部の人面は、如何なる意味を有するか、是寧角端と見るを當れりとすべきか。人面は蓋能言、曉四夷之語といへる能力を表示したるものに非るか。そは第四圖シヤパンヌ氏考古圖譜

卷二に載せらるゝ人面有翼の一角獸と比較すべきものならむ。之も亦唐代の明器なるべく、第二圖より更に一層能言、曉四夷之語の意味を表現したるものなるに似たり。その翼あるは、第五圖、西清古鑑卷三十八、漢角端硯滴二、之亦唐頃の作にあらざるか。及第六圖、大岡青造氏所藏の陶製有翼獸日本橋志所に於ても見るを得べし。第六圖は、形状稍變化せるものにして、頭上の二角の外に、更に鼻上に叉枝ある一角を有せり。靈獸有翼の事は、嘗て塚本工學博士が、東洋學藝雜誌第廿八卷第三、五、六、及考古學雜誌第一卷第十號に於て論ぜられし如く、敢て珍とするに足らざることなるも、日行萬八千里といへる能力を有する角端には、最相應しき表示と云ふべし。

以上は、本年六月廿四日、東洋史談話會に於て、吾人が述べたる説話の概要なり。考證の足らず、推論の妄なる點、極めて多からむ。切に諸君子の示教を仰ぐ。同會席上、白鳥教授より、白虎の四神に於

けるが如く、獸を以て西方に配するは、支那人の慣例にして、獺が銅鐵を食ふといふは、西方金に配當したるものならんと、教示せられたり。此篇を終るに際し、教授の高教を賜りたるを深謝す。

陶製一角獸

高一尺五分

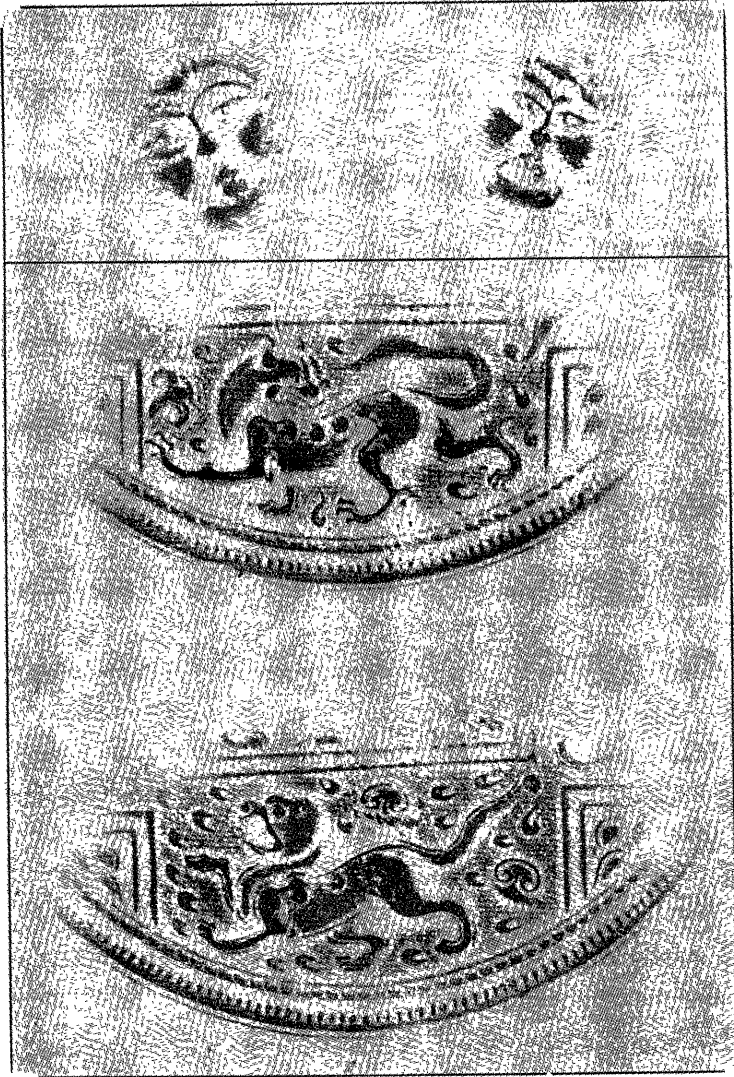
出支那
土那河
南省洛
陽縣



東京帝國大學文科大學所藏

圖 三 第

說
林

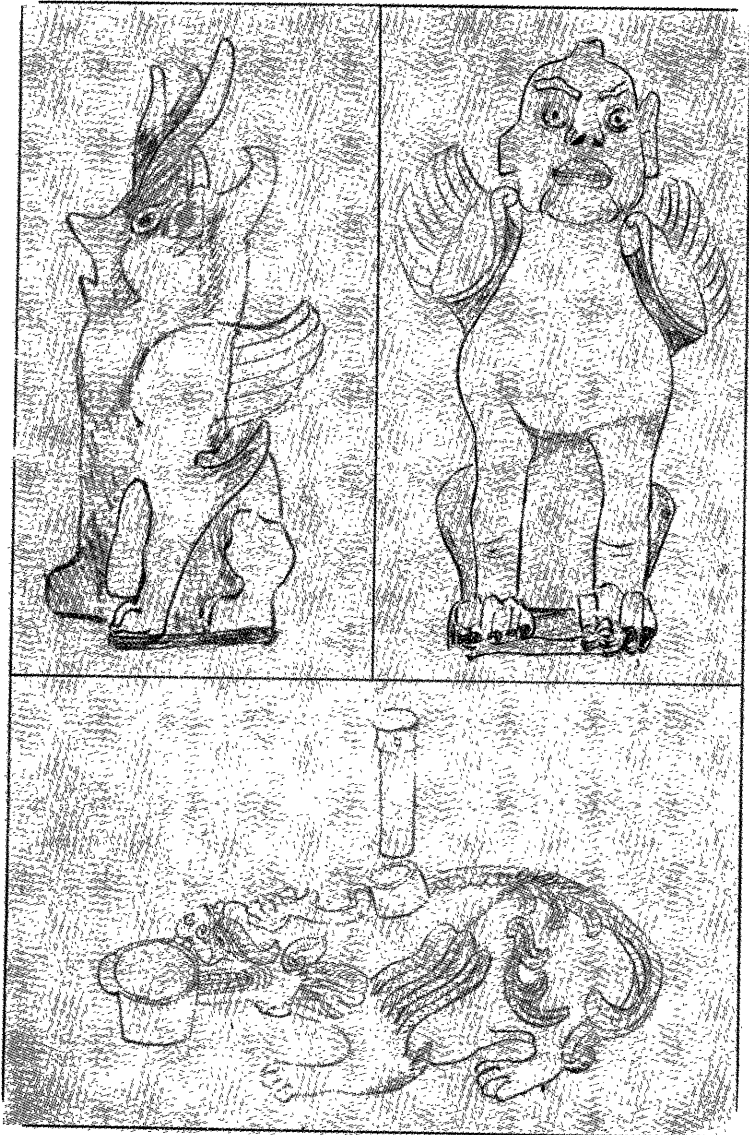


第四卷 (四二一)

圖 一 第

圖 六 第

圖 四 第



說
林

第四卷 (四三三)

圖 五 第